

2. 研修報告

高知県の小ナス栽培

木 山 孝 茂

はじめに

発表者は指宿植物試験場において、小ナス栽培を主に担当している。1996年5月31日から6月2日にかけて、園芸生産学コース松添直隆先生に同行させていただき、小ナスの生産地である高知県の農業技術センターと2軒の農家を見学する機会が得られたので、ここに報告する。

高知県の農業

高知県は四国地方の38%の土地面積を有しているが、総面積の83%は林野面積が占め、耕地率は6%弱である。

しかし、夏季の高温・多雨、冬季の温暖・多照条件と海岸平坦部から山間傾斜地まで、変化に富んだ地形を活かして多彩な農業が営まれている。なかでも、冬季の恵まれた気象条件から、ビニルハウスによる施設園芸が早くから発達し、野菜が農業生産の50%以上を占め高知県の農業の大きな特色となっている。

高知県農業技術センター

高知県では、農業技術センターを中心に山間試験場、茶業試験場、果樹試験場の4つの研究機関で、高知県農政の「生産性の高い生鮮食料供給基地としての機能の充実強化を図る」という基本方針に基づき、平坦部では園芸農業等を中心に、適地適産による周年安定供給を、中山間地域においては、変化に富む自然条件を活用した複合経営を目指し、試験・研究が行われている。

今回見学した高知県農業技術センターでは施設野菜科による高品質安定生産技術の確立、小ナスのロックワールによる水耕栽培試験を行っていた。現在高知県における小ナス栽培は、県外産地との競争、生産者の高齢化等による生産量の横這い状態が続いているが、試験は実用化の段階に入っており、農業技術センターでは小ナスの水耕栽培の普及による農作業の省力化・低コスト化を期待している。

北村 陽氏農場

次に高知市で小ナス栽培を営む北村さんのビニルハウスを見学した。北村さんは14年前から十市小ナスの栽培に取り組んでおり、栽培は9月中旬に定植後、翌年の6月中旬まで行っている。栽培方法はハウス内に畦を作り、株間は60cm間隔、1条植えであった。指宿ではY字2本仕立てが普及しているが、北村さんは3本仕立てであった。土壌の消毒は湛水サウナ方式を用い、消毒後堆肥は入れず、定植1ヶ月前に生ワラを入れている。灌水は2日おき、2人で2時間かかるとのことであった。

宮崎 氏農場

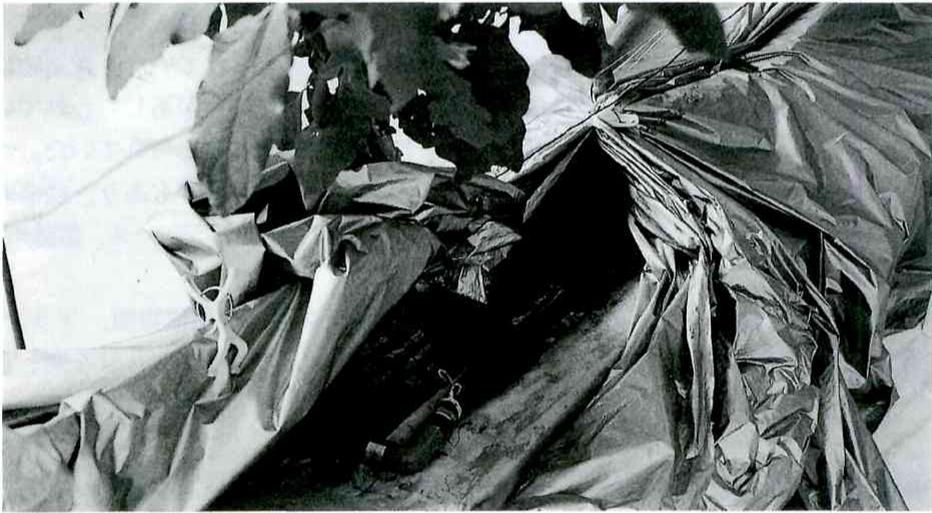
最後に見学した安芸市で同じく十市小ナス栽培を営む宮崎さんは、栽培期間は9月下旬から翌年の6月中旬、栽培方法は畦をビニルで囲い株間は75cm間隔、3本仕立て2条千鳥植え、灌水方法は自動灌水装置を設置し、小ナスの出荷は4月がピークで、生産量は反当9000kgとの話であった。宮崎さんは、耐用年数が3～4年の新型のビニルを導入し、台風が襲来してもビニルを張ったままであるが、価格が従来のビニルの2～2.5倍程度するとの話であった。

最後に

今回高知県の小ナス栽培の見学により、指宿植物試験場の小ナス栽培にも従来の2本仕立てを一部、3・4本仕立てとし、収量、作業能率などを現在比較検討している。



高知県安芸市のビニルハウス群



高知県農業技術センターでのロックウールによる小ナス試験栽培



十市小ナス